

別れ

【子どもたちを支えているようで、実は子どもたちに支えられているのが教師である。しかし、残念なことにそのことに気づくのは後になってからのことが多い】

4年生のO君は、号泣しながら教務主任の先生に連れて来られた。担任の先生とトラブルがあり、興奮して先生の指導に従わないようで、間に入った教務主任の先生が困って校長室に連れてきたのだ。校長はスーパーマンではない。困ったから校長室に連れて来られても、こっちは困ってしまう。

これがO君との出会いである。

その後O君は、校長室で生活するようになる。学級でうまくいかないようだ。担任の先生と相談をして1日2時間を限度に校長室にいてもよいこととした。O君の好きなプラモデルと一緒に作ったり、野外に観察に出かけたり、算数や国語の勉強をしたり。私はO君のための準備で忙しくなった。

しかし、いつまでも校長室に置くわけにはいかない。校長室にいるのは1日1時間とするようO君と約束した。いつかは、教室に帰さなくてはいけない。そう思いながらO君との暮らしは続いた。

その日は、意外な形でやってきた。どんな理由だったか覚えてはいないが、私はいつもより強くO君を叱った。O君はプイと校長室を飛び出した。私は心配になり校内を探した。どこにもいない。まさかと思い、教室をのぞくと、自分の席にちゃんと座っている。

次の日からO君は全く校長室に来なくなった。時々気になり担任の先生に様子を聞いたりしたが、私から声をかけることはしなかった。O君のために費やす時間がなくなり、時間的には楽になったが、充実しない日々となった。

数カ月が過ぎた。私はO君の友達に「たまには校長室に来るように」と伝言を頼んだ。私もO君も意地を張っていることに気づいたからである。しばらくして、再びO君は友達を連れて休み時間や放課後、校長室に来るようになった。私と話をしたり、遊んだりしていった。

その年度末、私は異動することとなった。離任式が終わって校長室に戻ると、O君が友だち何人かと一緒に来て、いつものようにぶっきらぼうにこう言った。

「校長先生、さっきのお別れの式、あれって、ドッキリカメラでしょ？」

私も別れるのがつらかった。O君は5年生になっていた。